

主義の『型』の問題が現れて来る。……その原因は何に求むべきであらうか(二一七頁)。其はイギリスにあつては「土地制度の特質たる封建的土地所有制のいち早く崩壊とヨーロッパ層の成立を基礎として可能であり必然であつた(二二三頁)」に對し「オランダの『都市織元』は……封建的地主と協定を結ぶなり或ひは自ら封建的地主になるなりして、その領主的司法權により『農村の織元』の成長を抑止して失つた(二二八—二九九頁)」からである。換言すれば、斯る型の相違は全く封建制度の崩壊如何に依存すると説かれる。私は、素より斯る事實を無視し、其結論を否定せんとする者ではない。然し私には、是は此問題への一應の解答であつても、尙凡て盡されたとは考へられないのである。著者自ら、問題の核心は土地制度にあり、其解明は他の機會にゆづるとされる。本書を「序説」とせられる所以(二二三頁)であり、或ひは望蜀の讖を免れないかも知れないけれども、本書「序」の詞に期待した私には、尙少しく満されないものゝあるのを覺える。

學年末の慌しさに、本書の眞意を誤り把握して、疑を抱き足りなさを感じたのかも知れない。不遜の妄評を著者に詫びつゝ、教示を乞ふ次第である。(時潮社發行、定價貳圓貳拾錢)(西井克己)

大陸支那の現實

藤田元春著

本書は第一篇通説と第二篇地方誌とから成る。通説に於ては版

圖、國名から地形、氣候、動植物の如き自然地理的事項、住民、聚落、産業、言語、宗教、社會に至る人文地理的方面のすべてを網羅し、その叙述の範圍はアジア東斜面の全體を含み、地方誌に於ては所謂支那本部の各地から西藏、新疆、蒙古に互り、附するに滿洲國の一篇を以てしてゐる。

それ故にこれは要約された一篇の支那地誌である。

だが、殆ど教科書的であるともいへるこの體制は、自から支那萬般の事象について讀者に教示するところあらんとする著者の意圖に出でたものであらう。新しく船出する大陸支那の舵輪を握る我々日本國民に何よりもまづその支那を正しく知らしめること、これを措いて著者の念願はない。予輩學窓を出で、二十年、日夕禹域の地理や歴史に親しむものゝ將に勤むべき時は來た。銃後の責務この外にあらじとぞ思ふ。——この調子の高い著者の自序に本書の成立はそのまゝ物語られてゐる。

それ故にこれは單なる一篇の支那地誌ではない。

著者のこの態度は北支の治河を第一の要務とし、交通網の完成を希求し、運河を通ずるの利を述べるなど、自からその抱懐する經綸の片鱗を隨所に現はしてゐる。ことに黄河を南流さして之をその儘にしておいてよいといふのは江蘇江北の地理を知らない人の放言であるといひ、「史記に既に三江五湖の利を論じて以來三千年、現在も猶支那はこの江湖から再び更生するであらうことを信ずる」と叙べる如き、これら著者の立言は常に東西の典籍に目を曝し身親しくその地に旅して得たこの國の地理、歴史への深い

洞察の上に築かれてゐることを知らねばならぬ。この意味に於て著者は飽までも學徒であつた。それ故にこそ、その叙述は努めて平易なるを期しながら尙且つ著者独自の見解の行間に閃くものがあつて私達に深い示唆を投げかける。住民の章に於て、夷東南蠻と稱せられた海岸島嶼民族が漢民族の文化に有力な作用を及ぼしたものと論じた如き、恐らくは著者自身も快心の一節であらうか。

その叙述の方法は、いはゞ歴史主義者である著者として當然歴史地理的である。それは艦でロシング・バックを以て淮南子を裏付ける態度であり、又支那工業の勃興を希望して「せめて康熙乾隆の盛世にまで更生するやうにしたい」とまで語らしむるものであるが、かゝるものが、かの履「無味乾燥」の一語で片づけられる分析的方法よりも記述を多彩にし感銘を印象的ならしむる効果があつて、本書の目的に最もよく副ふたものであることは否まれぬところである。行文は、この著者のどの著述にも見られるやうに極めて平明であるばかりでなく、豊富な圖版や寫眞と相俟つて殆ど紀行文にみるやうな具體性さへもつてゐる。

たゞ本書が全般的な支那地圖を附載しなかつたのは何故であらうか。坊間にその類が多いとはいへ、この書の性質よりしても、常に本文と對照せしむべき一葉の圖幅を欲するのは望蜀の念のみではあるまい。引用書のこと、序文に斷り書はあるけれども、なほ著者が多年涉獵した重要な書目を擧げたならば、後進の我々を披導するところより大であつたらうと惜しまれる。

なほ終りにこの書が著者還暦の日に成つたものであることを附記して聊か著者の爲に祝意を表したい。(四六版、三八〇頁、東京富山房發行、定價貳圓五拾錢)(室賀信夫)

大陸潜行記

エラ・マイアール著

多賀義彦譯

最近の我國の出版界に於ける一つの傾向として、陝西・甘肅・青海・寧夏・新疆などの支那の西北邊疆諸省に於ける旅行記の翻譯書が續々と出版されることが認められる。例へば昨年度の出版に於ても、陳賡雅「支那邊疆視察記」・長江「中國の西北角」・蘭州西安寧夏「ヘディン」馬仲英の逃亡「中央亞細亞探險記」・マイアール「大陸潜行記」などが擧げられる。それは云ふ迄もなく日支事變以來我々一般にも、今後の新支那建設に際して西北地方が如何に重要な意義を有して居るかはつきりと認識されて來たからであるが、併し今迄の所餘りにも我々の關心が此等の地方に拂はれて居なかつた爲、差當つての我々の欲求を充すものとして、先づ此等の邊疆地方の所謂ルポルタージュが求められるのは當然のことであらう。

「大陸潜行記」は Ella Kuni Mailart. Forbidden Journey from Peking to Kashmir. 1938. の全譯書であるが、著者マイアールは譯者の序文によればコスモポリタンとも云ふべきスイス生れの若い婦人記者である。本書の内容の一つ一つに就いては紹介